

平成 18 年度 第 50 回
岩手県教育研究発表会発表資料

社会/地歴・公民

中学校社会科における「社会的な思考・判断」につ いての評価の在り方に関する研究

評価問題の作成と活用をとおして

研究協力校

花巻市立南城中学校

研究協力員

盛岡市立下橋中学校 教諭 及川 敏彦
奥州市立水沢中学校 教諭 本田 守

平成 19 年 1 月 9 日
岩手県立総合教育センター
教科領域教育室
佐藤 亥 巻

目 次

I	研究の目的	-----	
II	研究の方向性	-----	
III	研究内容与方法	-----	
	研究の内容与方法	-----	
	研究協力校	-----	
IV	研究結果の分析と考察	-----	
	中学校社会科における「社会的な思考・判断」についての評価の在り方に関する 基本構想	-----	
	(1) 中学校社会科における「社会的な思考・判断」に関する基本的な考え方	-----	
	(2) 「社会的な思考・判断」についての評価問題の作成と活用をすることの意義	-----	
	(3) 評価問題の作成と活用をとおして社会的な思考力・判断力を める指導の展開	---	
	(4) 評価問題の作成と活用をとおして社会的な思考力・判断力を める指導に 関する基本構想図	-----	
	評価問題の作成と活用をとおして社会的な思考力・判断力を める指導に関する 手だての試案	-----	
	(1) 手だての試案について	-----	
	(2) 検証計画	-----	
	基本構想に基づいた評価問題の作成	-----	
	(1) 評価問題作成でおさえておきたいこと	-----	
	(2) 評価問題作成の手順	-----	
	(3) 評価問題作成の例	-----	
	授業実践及び実践結果の分析と考察	-----	
	(1) 中学校社会科歴史的分野において「社会的な思考力・判断力」を める授業 実践の概要	-----	
	(2) 実践結果の考察と分析	-----	
	中学校社会科における「社会的な思考・判断」についての評価の在り方につい てのまとめ	-----	12
	(1) 成果	-----	12
	(2) 課題	-----	12
V	研究のまとめと今後の課題	-----	12
	研究のまとめ	-----	12
	今後の課題	-----	12

I 研究の目的

平成17年度学習定着度状況調査では、社会科の全体的な傾向として、「『社会的な思考・判断』においては十分に学習が定着していない状況がみられる」ということが指摘されている。そして、この「社会的な思考・判断」については、平成15年度及び平成16年度の調査においても課題とされている。

その背景としては、①「社会的な思考・判断」のとらえが十分ではなく、どのように育成すればよいか経験則に任せられていること、②どのように見取ればよいか、すなわち評価方法が十分に確立してはいない状況があること、③ペーパーテストに限って言えば、どのような問題で評価をすればよいか戸惑いを抱えていること、といった状況が考えられる。

このような状況を改善するためには、「社会的な思考・判断」を見取る評価について整理し直すことが必要である。中でも、「社会的な思考・判断」にかかわる的確な評価問題を作成し活用を図りながら、その実現状況を把握し、指導に生かしていくことが必要である。

そこで、本研究は、評価問題の作成と活用をとおして「社会的な思考・判断」の評価の在り方について明らかにし、中学校社会科における学力の向上と指導の改善に役立てようとするものである。

II 研究の方向性

中学校社会科における評価問題の作成と活用方法を示し、「社会的な思考・判断」の評価の在り方について明らかにする。

III 研究の内容と方法

1 研究内容と方法

- (1) 「社会的な思考・判断」についての評価の在り方に関する基本的な考え方の検討 文献法
- (2) 「社会的な思考・判断」についての評価問題の作成 文献法
- (3) 「社会的な思考・判断」について作成した評価問題の活用 授業実践、テスト法、質問紙法
- (4) 「社会的な思考・判断」についての評価の在り方に関する研究のまとめ

2 研究協力校

花巻市立南城中学校

IV 研究結果の分析と考察

1 中学校社会科における「社会的な思考・判断」についての評価の在り方に関する基本的な考え方

- (1) 中学校社会科における「社会的な思考・判断」に関する基本的な考え方

「社会的な思考・判断」とは、「社会的事象から課題を見だし、社会的事象の意義や特色、相互の関連を多面的・多角的に考察し、社会の変化を踏まえ公正に判断する」ことである。

「社会的事象から課題を見出す」とは、社会的事象について自分のもっている知識や様々な資料を基に学習課題を設定することである。「社会的事象の意義や特色、相互の関連を多面的・多角的に考察する」とは、社会的事象のもつ背景や因果関係、立場や役割、影響、理由、条件、変化などを多面的・多角的に考察することである。「多面的」とは、学習対象としている社会的事象が様々な面をもっていることをあらわしている。「多角的」とはそうした社会的事象を様々な角度から考察し理解することを意味している。「社会の変化を踏まえ公正に判断

する」とは、多面的・多角的な考察を基に学習課題を決定したり、学習課題を解決するために必要な情報は何かを決定したり、学習課題の解決のために考えを決定したりすることである。つまり、本研究における「社会的な思考・判断」とは、社会的な事象について、知識や資料を基に学習課題を決定し、その解決のために、社会的な事象のもつ背景や因果関係、立場や役割、影響、理由、条件、変化などを様々な面と様々な角度から考察し、学習課題の解決のために考えを決定することととらえる。**【表1】「社会的な思考・判断」の構成要素**

本研究では、【表1】の	構成要素	内 容
ように、「社会的な思考・判断を「事実をとらえる」「関係づける」「意味をとらえる」という三つの要素で構成されるものと考える。	事実をとらえる	既習事項や過去の経験を基に、多様な事実をとらえ、学習課題を決定する。
	関係づける	情報を収集し、事実と事実の関わりを基に、学習課題を追究する。
	意味をとらえる	事実と事実の関わりを基に、自分の考えをまとめ、学習課題を解決する。

らえる」という三つの要素で構成されるものと考える。

(2) 「社会的な思考・判断」についての評価問題の作成と活用をすることの意義

中学校学習指導要領社会科の教科の目標は、「広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」である。これまでの知識の習得に偏りがちであった教育から、自ら学び、自ら考えるなどの「生きる力」を育成する教育へとその基調を転換していく（中教審答申）ことが求められている。このことから、全体を通して公正さに留意して多面的・多角的な思考・判断ができるような学び方を生徒に身に付けさせることが大切になる。

これまでの指導では、「社会的な思考・判断」のとらえが十分ではないために、授業中での発問に対する生徒の反応や定期テストなど評価問題に対する生徒の解答から、生徒の「社会的な思考・判断」の実現状況を的確に評価できなかつたため、適切な指導に結び付けられないことが多かった。

そこで、「社会的な思考・判断」のとらえについて整理し直し、それに基づいて評価問題を作成することで、指導と評価の一体化を図り、社会的な思考力・判断力を高める授業を展開することができる。と考える。

(3) 「社会的な思考・判断」についての評価問題の作成と活用の展開

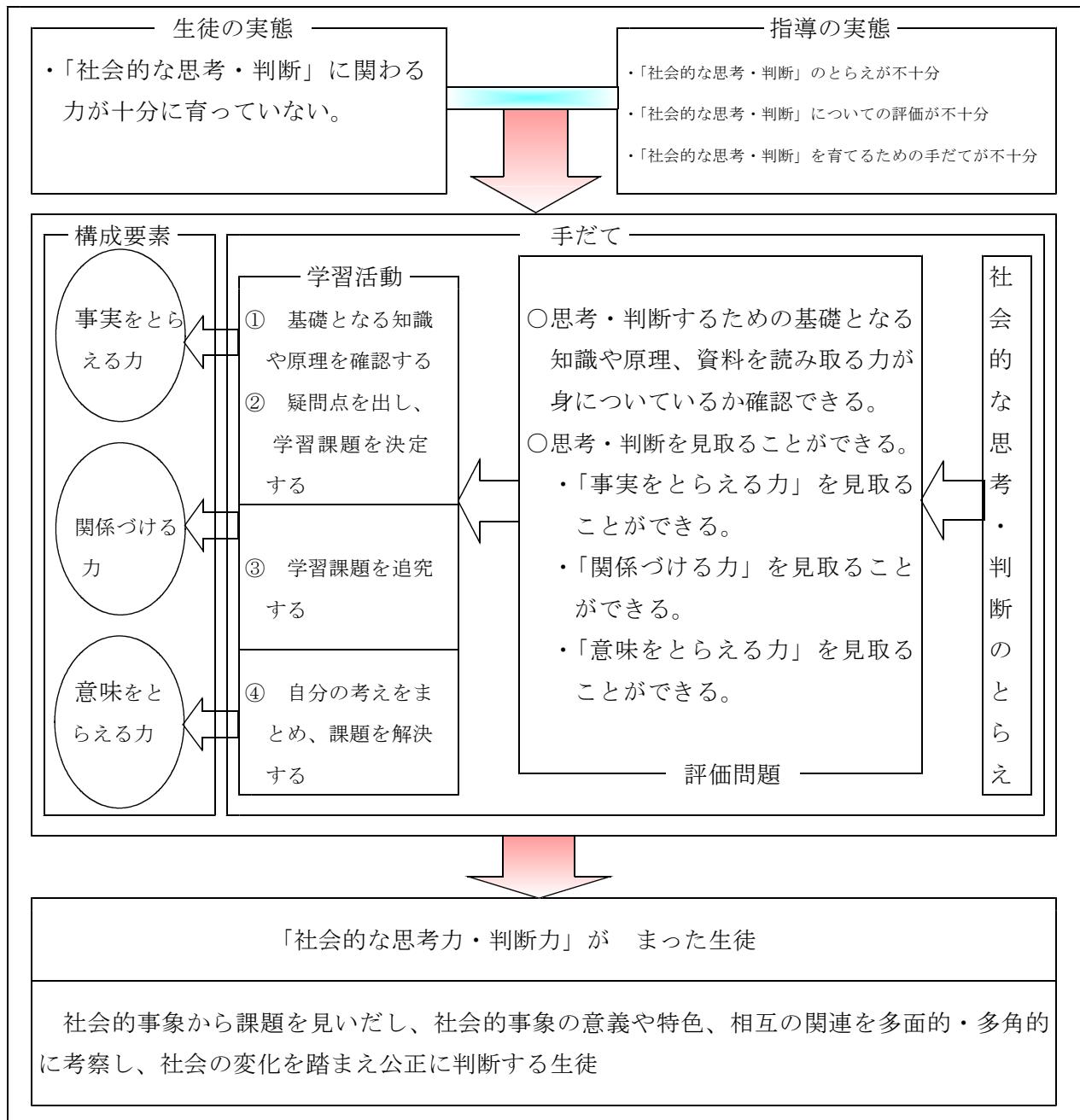
学習指導要領から単元や単位の指導目標を設定する際に、4観点の評価規準と具体的評価規準を作成し、それに基づいて「社会的な思考・判断」に関わる評価問題を作成する。そして、この評価問題を授業の中で活用していくこととする。具体的には、授業の導入段階で、その時間の「社会的な思考・判断」の目標に関わる、思考・判断するための基礎となる知識や原理、資料を読み取る力が身に付いているかを評価問題を基に確認する。確認の結果、不足している部分が明らかになった場合は、その場で補充指導を行う。その上で、既習事項や過去の経験を基にして疑問点をさせ、学習課題を決定させることで、「社会的な思考・判断」の三つの構成要素の「事実をとらえる」力を育てていく。この学習過程で評価問題の「事実をとらえる」力に関わる問題を活用して発問を行っていく。

学習課題の持つ社会的な背景や因果関係、立場や役割などの情報を収集させ、課題を追究させることで、「社会的な思考・判断」の構成要素である「関係づける」力を育てていく。この学習過程でも、評価問題の「関係づける」力に関わる問題を活用して発問を行っていく。

影響や理由、条件、変化などを様々な面と様々な角度から考察させることで、自分の考えを

まとめ、課題を解決させ、「社会的な思考・判断」の構成要素である「意味をとらえる」力を育てていく。この学習過程でも、評価問題の「意味をとらえさせる」力に関わる問題を活用して発問を行っていく。

- (4) 中学校社会科における「社会的な思考・判断」についての評価の在り方に関する基本構想図
 中学校社会科における「社会的な思考・判断」についての評価の在り方に関する基本構想を【図】にまとめた。



【図1】中学校社会科における「社会的な思考・判断」についての評価の在り方に関する基本構想図

2 基本構想に基づく手だての試案

- (1) 手だての試案について

基本構想に基づき作成した手だての試案を【表】に示す。

【表2】基本構想に基づき作成した手だての試案

段階	学習活動	評価問題の活用	指導上の留意点
導入	○思考・判断の基となる力の確認 ○疑問に思うことや調べてみたいことをあげる ○学習課題を決定する	・思考・判断するための基礎となる知識や原理、資料を読み取る力を確認するための問題を解かせる ・事実をとらえる問題を基に発問をする	・思考・判断するための基礎となる知識や原理、資料を読み取る力で不足している部分を確認して終わりにせず、必ず不足している部分の補充を行う ・既習事項や過去の経験を想起させ、疑問に思うことや調べてみたいことを持たせる ・疑問点や調べてみたいことが持てるような資料提示や発問を行う
展開	○学習課題を追究する ○追究したことを整理する	・関係づける問題を基に発問をする	・学習課題の社会的な背景や因果関係、立場や役割などの情報収集で終わりにせず、収集した情報を基に関係づけ、整理するところまで行わせる
終結	○学習課題を解決する	・意味をとらえる問題を基に発問をする	・関係づけ、整理した学習課題から自分なりの考えをまとめさせる。

(2) 検証計画

検証計画は【表3】のとおりである。

【表3】検証計画

検証項目	検証内容	検証方法	処理・解釈の方法
思考・判断の形成状況	・評価問題の妥当性	・テスト法により事前及び事後に実施する ・ワークシートの記述内容について実施する	・テスト法を用いて事前・事後テストを行い、分析・考察する。 ・ワークシートの記述内容を分析・考察する。
学習に関する意識の状況	・社会科の学習で思考したか	・観察法により事前及び事後に実施する	・評価問題を活用した後の生徒の感想について分析・考察を行う。

3 基本構想に基づいた評価問題の作成

(1) 評価問題作成でおさえておきたいこと

ア 「社会的な思考・判断」を問う場合、構成要素すべてに目をむける

「社会的な思考・判断」を問う評価問題を作成する際に、自分の考えをまとめ、学習課題を解決する場面の「意味をとらえる」要素の問題に偏りがちなので、「事実をとらえる」「関係づける」要素についても評価問題を作成する必要がある。

イ 「社会的な思考・判断」の基となる力の確認をする

「社会的な思考・判断」をするための基となる知識や原理、資料を読み取る力が身についているかを確認せずに問題を作成すると、一見「社会的な思考・判断」を問う問題のように見えても、「社会的な思考・判断」をするための基となる知識や原理、資料を読み取る力が身につけていない生徒からは「社会的な思考・判断」の力は見取れず、知識や原理、資料を読み取る力がついていないことを見取る問題になってしまう場合がある。

ウ 「社会的な思考・判断」と知識との関係

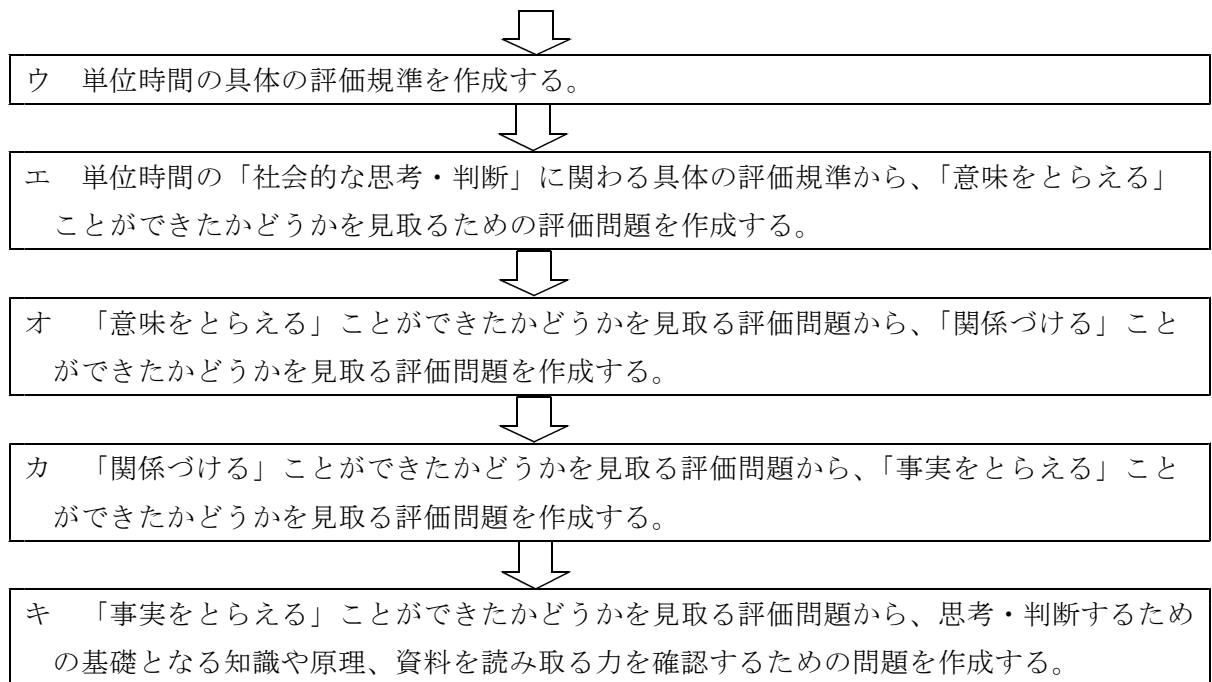
「社会的な思考・判断」を繰り返すことによってそれが知識に変化していくので、「社会的な思考・判断」を問う評価問題を作成する場合、同じ題材を同じ視点から繰り返すことは避けなくてはならない。

(2) 評価問題作成の手順

ア 学習指導要領から単元の指導目標を設定する。



イ 単元の指導目標から4観点の評価規準を作成する。



(3) 評価問題作成の例

ア 「第二次世界大戦後の日本と世界」 時間 の指導目標

- ① 戦後の日本の歩みを、民主化政策や憲法を中心に理解させ、世界の中の日本の立場を考えさせる。
- ② 東西対立など揺れ動く国際情勢について理解させ、両陣営の立場について比較しながら考えさせる。

イ 「第二次世界大戦後の日本と世界」の評価規準

- ① 社会的事象への関心・意欲・態度
 - ・第二次世界大戦後、国際社会に復帰するまでのわが国の動きを意欲的に追求しようとする。
- ② 社会的な思考・判断
 - ・わが国の民主化と再建の過程や国際社会への参加を通して、第二次世界大戦後、国際社会に復帰するまでのわが国の動きを多面的・多角的に考察できる。
- ③ 資料活用の技能・表現
 - ・敗戦から国際社会復帰までのわが国の歴史のあらましと世界の動きをさまざまな文献や見学・調査の結果などのさまざまな資料を収集し、追求した過程や結果をまとめることができる。
- ④ 社会的な事象についての知識・理解
 - ・敗戦から国際社会復帰までのわが国の歴史のあらましと世界の動きを理解し、日本がアメリカの強い影響下のもと国際社会復帰をしたことに気づく。

ウ 「冷戦と占領政策の転換」の具体の評価規準と評価問題

「冷戦と占領政策の転換」の具体の評価規準と評価問題を次頁【資料】に示す。

【資料1】 「冷戦と占領政策の転換」の具体の評価規準と評価問題

「冷戦と占領政策の転換」

1 具体の評価規準

- A アメリカの日本占領政策の転換方向やその目的、朝鮮戦争の経緯と日本の果たした役割について、冷戦を背景に考えることができる。
- B アメリカの日本占領政策の転換方向や、朝鮮戦争の経緯について、冷戦を背景に考えることができる。

2 思考・判断するための基となる知識や原理、資料を読み取る力を確認するための問題

- ① ソ連は何主義の国ですか。
- ② 中国で内戦を行っていたのはどこどこですか。
- ③ 第二次世界大戦が終わるまで、朝鮮半島はどここの国に支配されていましたか。
- ④ 第二次世界大戦中のアジアやアフリカの国々の多くは欧米諸国とどのような関係にありましたか。

3 本時の思考・判断に関わる評価問題

(1) 事実をとらえる

- ① ドイツは第二次世界大戦後、どうして東ドイツと西ドイツに分断されたのでしょうか。
- ② 朝鮮は第二次世界大戦後、どうして大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国に分断されたのでしょうか。
- ③ アジアに共産主義国の中華人民共和国が誕生したことは、米ソの関係にどのような影響を与えたのでしょうか。

(2) 関係づける

- ① ドイツの分断、朝鮮の分断、中華人民共和国の成立などから、アメリカとソ連の関係はどのように変化しましたか。
- ② 朝鮮戦争によって日本はどのような影響を受けましたか。

(3) 意味をとらえる

- ① アメリカの日本占領政策はどうして変化したのですか。
- ② アメリカの日本占領政策はどのように変化しましたか。

4 授業実践及び実践結果の分析と考察

- (1) 中学校社会科歴史的分野における「社会的な思考・判断」の評価問題を活用した授業実践の概要

ア 対象 花巻市立南城中学校 第2学年 1学級 (男子16名 女子15名 計31名)

イ 単元 「現代の日本と世界」 小単元 「第二次世界大戦後の日本と世界」(4時間)

ウ 評価問題を活用した授業実践の概要

手だての試案に基づいて作成した学習指導案に従い授業実践を行った。評価問題を活用した授業実践の概要(1時間分を抜粋)を次頁に示す。

本時の指導【 】 冷戦と占領政策の転換


○ 目標

- ① 国際連合の発足後、米ソの対立から冷戦が生じたことや、ドイツ・朝 が二つに分断されたことを理解する。
- ② 冷戦が激化する中で、日本に対する占領政策は大きく変化したことに気づくとともに、朝 戦争が起こった原因や、その影響について理解する。

○ 具体の評価規準

評価方法	具体の評価規準 思考・判断		
			努力を要する生徒への支援
・評価問題を基にした発問 ・ワークシートの記述内容	アメリカの日本占領政策の転換方向やその目的、朝 戦争の経緯と日本の果たした役割について、冷戦を背景に考えることができる。	アメリカの日本占領政策の転換方向や、朝 戦争の経緯について、冷戦を背景に考えることができる。	思考・判断するための基礎となる知識や原理、資料の読み取り方を想起させ、思考・判断するための方向性を示す。

○ 授業実践の様子

段階	学習活動	教師の支援	評価問題の活用
導入	今日の学習に関わりの深い部分を、ワークシートで確認しましょう。 1 復習項目など (1) () 革命によってソビエト政府ができ、1922年にソビエト社会主義共和国連邦となった。 この国は平等な国をめざす()主義。 (2) 中国では、孫文の中国国民党 ≡ 中国共産党 孫文の死後 ↓ 手を結ぶ ↓ ()の国民政府 ← → 中国共産党 ↓ 対立 ↓ 国民政府 ← → 中国共産党 ↓ 内戦 ↓ 台湾へ (アメリカの支持) 1949年 (ソ連の支持) (3) 第二次世界大戦が終わるまで、朝鮮は()に支配されていた。 (4) 第二次世界大戦中、アジアやアフリカの国々は、欧米諸国に()に支配されていた。	・ロシア革命によってソビエト政府→ 1922年にソビエト社会主義共和国連邦となったこと・社会主義の考え方を確認させる(P133・P176) ・国民党と共産党の関係を思い浮かべさせる。 ・韓国併合とその結果日本はどんなことを行ったか確認させる。 ・植民地というキーワードが出てくるように振り返らせる。	① ② ③ ④
	10分  国際連合の成立		

展開
30分

学習課題の確認

() 増える社会主義国

() 米ソの冷戦

ドイツは第二次世界大戦後、どのような経緯で東ドイツと西ドイツに分断されたのですか？

朝鮮は第二次世界大戦後、どのような経緯で大韓民国と朝鮮民主主義共和国に分断されたのですか？

アジアに共産主義国の中華人民共和国が誕生したことは、米ソの関係にどのような影響を与えたのでしょうか？

* アジアに共産主義国の中華人民共和国が誕生したことで、アメリカとソ連の関係はどうなりましたか。
1) 34年の間にアメリカよりなりました。

ドイツ、朝鮮、中国の変化によって、アメリカとソ連の関係はどのように変わりましたか？

冷たい戦争は、日本にどのような影響を与えていったか。

民主主義の国日本からアジアの防波堤日本に

冷たい戦争が進んだことで、日本はどのような影響を受けたか調べてみよう。
GHQの政策がどう変わったかを視点にするといいよ。



労働運動は...

財閥解体は...

朝鮮戦争の影響

() 日本の特需景気

() 警察予備隊がつくられる

まとめ

アメリカの日本占領政策は、なぜ変化したのですか？

アメリカの占領政策は、どのように変化しましたか？

・米ソの勢力争いが進んでいることを意識させながら説明する。

・米ソの対立を意識させ、ドイツや朝鮮の分断の理由を考えさせる。

中華人民共和国の面積は世界第3位。人口は世界第1位。このような国が共産主義国になり、ソ連の仲間になったということは、アメリカにとってはどうということだと思う。

(1) ①

〈事実をとらえる〉

(1) ②

〈事実をとらえる〉

(1) ③

〈事実をとらえる〉

(2) ①

〈関係づける〉

・中国やソ連と日本の位置関係および、当時の日本とアメリカの関係を意識させる。

・アメリカが日本に何を求めはじめたのか意識させる。

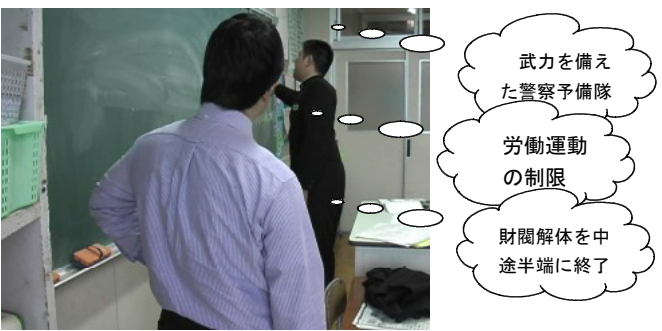
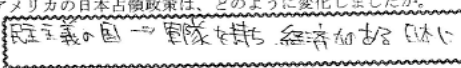
(2) ②

〈関係づける〉

・ . . . の学習を振り替えらせながら、自分の考えをまとめさせる。

(3) ①

〈意味をとらえる〉

終 結	<p>ワークシートに記入したことを黒板に書いてください。</p>	(3) ②
10 分		<p>〈意味をとらえる〉</p>
	<p>* アメリカの日本占領政策は、どのように変化しましたか。 </p>	

(2) 実践結果の分析と考察

ア 評価問題の妥当性

三つの構成要素「事実をとらえる」「関係づける」「意味をとらえる」の評価問題の妥当性について、記述内容によってその結果を分析した。

(1) 「事実をとらえる」について

- ① 「ドイツは第二次世界大戦後、どうして東ドイツと西ドイツに分断されたのでしょうか」
この問題が正解の者は、「アメリカ イギリス・フランスも とソ連で分けて支配していたから」、「アメリカとソ連とで冷戦が起きていたから」、「社会主義と資本主義が対立していたから」、「アメリカとソ連の対立があったから」などの記述を多くしており、東ドイツと西ドイツの分断理由についての思考・判断の形成がとらえられる。また、誤答の者も「ドイツをめぐって対立したから」、「支配していたから」と記述しており、「社会主義と資本主義」や「アメリカとソ連」などの具体的な言葉にはできないものの「事実をとらえる」ための思考・判断の形成がみられる。記述が無い者も「ソ連が社会主義」という「社会的な思考・判断」をするための基となる知識の有無を復習項目の中で確認しているため、この問題が「社会的な思考・判断」について見取ることができず、「社会的な思考・判断」をするための基となる知識や原理、資料を読み取る力の有無を問う問題に変化していないと考える。
- ② 「朝 は第二次世界大戦後、どうして大韓民国と朝 民主主義人民共和国に分断されたのでしょうか」
この問題が正解の者は、「北朝 はソ連に、韓国はアメリカに占領されたから」、「ソ連とアメリカの対立」などの記述を多くしており、北朝 と韓国の分断理由についての思考・判断の形成がとらえられる。また、誤答の者で「対立したから」と記述した者は、「社会主義と資本主義」や「アメリカとソ連」など具体的な言葉にはできないものの「事実をとらえる」ための思考・判断の形成がみられる。誤答の者で「朝 戦争で北と南で対立したから」「北朝 が武力で南下をはかったから」と記述したものは、朝 の分断と朝 戦争の流れが押さえられていないからだと考えられ、基となる知識・理解が誤っているために誤った思考・判断をしたと考える。記述が無い者も「ソ連が社会主義」を復習項目として

確認しているので、思考・判断の基となる知識や原理、資料を読み取る力の有無を問う問題に変化していないと考える。

- ③ 「アジアに共産主義国の中華人民共和国が誕生したことは、米ソの関係にどのような影響を与えたでしょうか」

この問題が正解の者は、「ソ連が有利になり、冷戦の緊張がまった」、「ソ連が有利になった」などの記述が多くあり、中華人民共和国の誕生によって米ソの関係がどう変化したのかについての思考・判断の形成がとらえられる。誤答の者で「共産主義になっている」と記述した者は、事実となる知識はあるがそれを基に思考・判断することができなかつたと考えられる。記述が無い者も次の「関係づける」の①の問題の記述内容からアメリカとソ連がどんな関係にあるかをおさえているかどうかを判断できるので、思考・判断の基となる知識や原理、資料を読み取る力の有無を問う問題に変化していないと考える。

() 「関係づける」について

- ① 「ドイツの分断、朝 の分断、中華人民共和国の成立などから、アメリカとソ連の関係はどのように変化しましたか」

この問題が正解の者は、「冷戦」、「対立している」、「敵対関係」などの記述を多くしており、ドイツの分断、朝 の分断、中華人民共和国の成立などからアメリカとソ連の関係についての思考・判断の形成がとらえられる。誤答は記述が無い者だけであるが、思考・判断の基となるドイツの分断、朝 の分断、中華人民共和国の成立は本時の学習内容なので、思考・判断の基となる知識や原理、資料を読み取る力の有無を問う問題に変化していないと考える。

- ② 「朝 戦争によって日本はどのような影響を受けましたか」

この問題の正解の者は、「経済が急激に発展した」、「特需景気となった」、「警察予備隊ができた」などの記述を多くしており、朝 戦争による日本の影響についての思考・判断の形成がとらえられる。記述をして誤答した者は1人おり、「自衛隊になった」と記述しているので、現在の組織の自衛隊という語句のみ記憶していたものと考えられる。朝 戦争は本時の学習内容なので、思考・判断の基となる知識や原理、資料を読み取る力の有無を問う問題に変化していないと考える。

() 「意味をとらえる」について

- ① 「アメリカの日本占領政策はどうして変化したのですか」

この問題が正解の者は、「共産主義に対抗する勢力にするため」、「強い味方を作りたかったから」などの記述を多くしており、アメリカの日本占領政策が変化した理由についての思考・判断の形成がとらえられる。記述をして誤答した者は 人おり、「経済・財政のたてなおし」、「軍隊をもつ」と記述している。 人とも変化の理由ではなく、変化の方向性について記述してしまったものと考えられる。アメリカの日本占領政策は本時の学習内容なので、思考・判断のもととなる知識や原理、資料を読み取る力の有無を問う問題に変化していないと考える。

- ② 「アメリカの日本占領政策はどのように変化しましたか」

この問題が正解の者は、「民主主義の国から軍隊を持ち、経済力のある国日本へ」、「民主主義の国から共産主義を防ぐとりでへ」などの記述を多くしており、アメリカの日本占領政策がどのように変化したかについて思考・判断の形成がとらえられる。記述をして誤答した者は 人おり、「民主主義の国から共産主義へ」、「社会主義に似てきた」と記述している。 人とも共産主義・社会主義のとらえが誤っているためだと考える。アメリカの占領政策の変化は本時

の学習内容なので、思考・判断の基となる知識や原理、資料を読み取る力の有無を問う問題に変化していないと考える。

イ 思考・判断の形成状況

評価問題の形成状況について、授業実践学級の平成18年度学習定着度状況調査と比較し分析した。

【表4】は作成した評価問題の正答率をまとめたものである。

【資料2】は平成18年度学習定着度状況調査の歴史的分野における問題で、主な観点が思考・判断の問題のうち、作成した評価問題と同様に記述式で作題されているものである。今回は歴史的分野の授業実践だったので、分野を歴史的分野にしぼって比較することにした。また、

同じ思考・判断に関する問題でも、選択肢による問題と記述式の問題では難易度が大きく変化するので、作成した評価問題と同様の記述式の問題にしぼって比較することにした。

【表4】の事後テストの正答率は、「事実をとらえる」、「関係づける」、「意味をとらえる」と下がっていくが、一番低い「意味をとらえる」問題でも正答率が37.5%、思考・判断に関わる問題全体では42.9%である。授業実践学級の【資料2】の正答率は13.8%なので、基本構想に基づいた手だての効果があつたと考える。

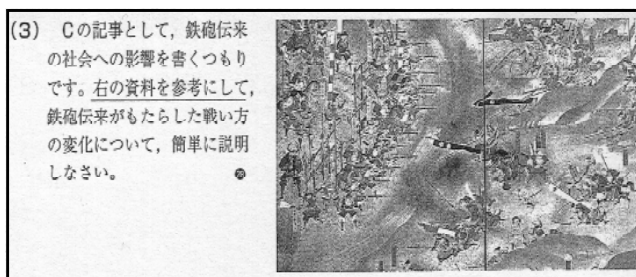
ウ 学習に関する意識の変容状況

【表5】は実践学級の生徒の感想を分類し、主なものを示したものである。ほとんどの生徒が考える授業について感想を書きおき、【表5】の1の感想のように「自分で考える」、「先生の話聞きながら考える」授業を「とても楽しく授業を受けることができた」ととらえていることから、「社会的な思考・判断」の場面を取り入れた授業に対して肯定的な意見をもっていると考える。

【表4】 作成した評価問題の正答率

構成要素	問題番号	事前テスト (正答率)		事後テスト (正答率)		
事実をとらえる	①	10%	7.3%	65%	47.3%	41.9%
	②	7%		40%		
	③	5%		37%		
関係づける	④	0%	0%	33%	38.0%	
	⑤	0%		43%		
意味をとらえる	⑥	0%	0%	27%	37.5%	
	⑦	0%		48%		

【資料2】 学習定着度状況調査の思考・判断の問題



【表5】 実践学級の分類別生徒の感想

- 1 思考・判断に関わるもの
 - (1) 考える授業について
 - ・社会は、暗記することが大事だと思っていたけど、そうじゃないんだなあ、自分で考えることが大切なんだなあと思った。新しい発見もできた良い授業だったと思う。
 - ・自分の頭で考えるという方法を使って、ただただ先生の話聞いてプリントに写し書きをして「はい終わり」ではなく、先生の話聞きながら考える。そして自然に身についていくのでまた違った雰囲気での新感覚の授業だったなあーと思い、とても楽しく授業を受けることができた。
 - (2) 問題を解くことを中心に
 - ・この1週間、授業の中で私が一番思ったことは、はっきりとした答えが分からなくても、流れやその時期におこった事などを考えていけば、確信がある答えではないけど、けっこう、書けたりするんだなあと思います。なので、これからは、分からなくても少し考えてみていこうにしたいと思います。
 - 2 思考・判断以外について
 - (1) 感想
 - ・キーワードや重要なことを何気にしゃべっているの注意して聞くことができた。1週間プリントは変わらず、環境にもよかったです。
 - (2) 問題を解くことについて
 - ・3回のテストがあつたけど、私には1週間は少し短くて、できる問題がちよっとずつしか増えなかった。
- * 生徒の記述どおり示した。

5 中学校社会科における「社会的な思考・判断」についての評価の在り方についてのまとめ

中学校社会科における「社会的な思考・判断」についての評価の在り方に関して、成果と課題をまとめる。

(1) 成果

- ア 「社会的な思考・判断」のとらえについて整理し直し、それに基づいて「社会的な思考・判断」に関わる評価問題を作成することができた。
- イ 「社会的な思考・判断」に関わる評価問題を授業の中で活用することで、「社会的な思考・判断」の力を伸ばすことができた。
- ウ 「社会的な思考・判断」を行う場を授業の中に設定することで、生徒の社会科学習への意欲を喚起することができた。

(2) 課題

「社会的な思考・判断」に関わる評価問題を作成し、授業の中で活用するためには、生徒が自分の考えを適切に文章で表現する力や、言葉に出して表現する力の育成を心がけなければならないと考える。また、指導者も生徒が記述した文章や発言した言葉から生徒の変容を見取る力を一層高めていくことも大切だと考える。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

この研究は、評価問題の作成と活用をとおして「社会的な思考・判断」の評価の在り方について明らかにし、中学校社会科における学力の向上と指導の改善に役立てようとするものである。

そのために、「社会的な思考・判断」のとらえについて整理し直し、それに基づいて評価問題を作成し、評価問題を活用した授業実践を行い、結果を分析し考察することができた。

その結果、中学校社会科における評価問題の作成方法と活用方法を示し、「社会的な思考・判断」の評価の在り方について明らかにすることができた。

「社会的な思考・判断」を繰り返すことによってそれが知識に変化し、その知識が次の「社会的な思考・判断」の基礎となるために密接な関係がある。また、資料活用の技能・表現や社会的な事象への関心・意欲・態度も「社会的な思考・判断」と密接な関係があるので、4つの観点で示されている力の一つも欠けることなく育成することが大切だと考える。

2 今後の課題

今年度授業実践をとおして検討することができなかった「地理的分野」、「公民的分野」の評価問題の作成と授業での活用について取り組んでいきたいと考える。

【参考文献】

- 石田恒好・木下康彦編集(1994), 『観点別評価の手順』, 図書文化
- 北尾倫彦・祇園全禄編集(2004), 『新しい観点別評価問題集』, 図書文化
- 橋本重治原著・改訂版編集(財)応用教育研究所(2003), 『教育評価法概説』, 図書文化

<おわりに>

この研究を進めるに当たり、ご協力いただきました研究協力校の先生方に心から感謝申し上げます。